

国の豊かさの性質とその原因についての検討
An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth
of Nations.

アダム・スミス^{*1}著 翻訳: 山形浩生^{*2}

2004年3月26日

^{*1} LL. D and F. R. S, 元はグラスゴー大学における道徳哲学教授

^{*2} ©1999-2003 山形浩生 本翻訳は、この著作権表示を残す限りにおいて、訳者および著者に一切断ることなく、商業利用を含むあらゆる形で自由に利用・複製が認められる。プロジェクト杉田玄白正式参加。 <http://www.genpaku.org/>

目次

序文と、この本の構想	i
第 I 部 労働の生産力向上の原因と、その生産物がいろいろな階級の人々に自然に分配される秩序について	1
第 1 章 分業について	3
第 2 章 分業をもたらす原理について	11
第 3 章 分業は市場の規模によって制約される	15
第 4 章 お金の起源と使われ方	19
第 5 章 商品の本当の価格と名目の価格、あるいは労働での価格とお金での価格	25
訳者あとがき	27
はじめに	27
題名と翻訳について	27

序文と、この本の構想

それぞれの国での毎年の労働は、そこで毎年消費される必需品や、生活上の便利なものを供給する源だ。そしてその必需品や生活上の便利なものは必ず、その労働から直接産み出されるものと、そうやって産み出したものを使ってほかの国から買うものとで構成される。

だからこういう産物やそれを使って買う物が、それを消費する人間の数に比べて大きい小さいかに応じて、その国のすべての必需品や、ときどき欲しくなる生活上の便利なものが、十分に供給されるか不足するかも決まってくる。

でも、この比率はどの国でも、2つのちがった条件によって制限されてくる。まずはその労働が全体としてどれだけ上手に使われるか、どれだけ柔軟に使われるか、どれだけきちんと考えて使われるか、といったことだ。そしてもう一つは、役に立つ労働で雇われている人数と、雇われていない人数との比率だ。それぞれの国の土壌、気候、領土の広がりなどがどうであろうとも、その年間供給の豊かさや枯渇ぶりは、それぞれの場合におけるこの2つの条件によってくる。

この供給がたっぷりあるか、カツカツかという問題は、この2条件の中でも後者よりは前者に左右されるほうが大きいようだ。狩猟や漁業を中心とする野蛮な国では、働ける個人はすべて、おおむね役に立つ労働のために雇われていて、生活上で必要なものや便利なものを、自分自身のためか、さもなければ老いすぎるか幼すぎるかして、狩猟や漁業にいけない家族や部族の者たちのために、精一杯供給しようとする。でもこういう国は、悲惨なほどまずしいから、しばしば物資の不足だけのために自分たちの幼児や老人や長期の病人を直接殺害するか、あるいは遺棄しなければならないところまで追いつめられる（またはそう自分では考える）。飢え死にさせたり、野獣に喰われるに任せたりするわけだ。

逆に文明化されて栄えている国では、多数の人はぜんぜん働かないけれど、その多くは働く人々の大部分に比べて、10倍、いやしばしば100倍もの労働の産物を消費する人々だったりする。それでも社会全体としての労働の総産物はきわめて大きいので、全員に供給がたっぷりいきわたり、労働者は一番階級が低く貧困な者であっても、儉約して生産的な者ならば、どんな野蛮人であっても手に入れられないほどの、生活必需品や生活上の便

利なもの分け前を享受できることが多い。

この労働の生産力という点での向上と、その生産物が社会の様々な階級や状態の人々に自然に分配される秩序というのが、この検討における第一巻の主題となる。

ある国で実際に労働力がどれだけ上手に、柔軟に、考えて使われているにせよ、その状態が続いているときには、その国での年間供給が多いか少ないかは、その年に有用な労働に雇われた人数と雇われなかった人数との比率に依存するしかない。有用で生産的な労働者の数は、後に示すように、どこでもそういう労働を働かせるための資本ストックの量に比例する。だから第二巻は、資本ストックの性質をとりあげる。資本ストックがどのようにしてだんだん蓄積されるか、そしてその利用方法のちがいに応じた、使役する労働量のちがいについてもとりあげる。

労働の使いかたのうまさ、柔軟さ、判断力などがそこそこ先進的な諸国でも、その一般的なやりかたや方向性の面で、それぞれとても異なった考え方をとっている。そして各国の産物の量から見て、そうした考え方がすべて同等の成果を挙げているとは言えない。ある国の政策は、地方部の産業を大幅に奨励してきた。別の国の政策は、都市部の産業を大いに奨励してきている。あらゆる種類の産業を平等かつ無差別に扱ってきた国は、ほとんどない。ローマ帝国の崩壊以来、ヨーロッパの政策は、地方部の産業である農業よりも、工芸、製造業、商業など都市部の産業を重視してきた。この政策を導入して確立させることになったと思われる状況については、第三巻で述べてある。

こうしたいろいろな考え方は、たぶん特定の人々の個人的な利害や偏見に基づいて導入されたものだ。それが社会全体の一般的な厚生にどんな影響を持つかなんて、まったく無視され、予測しようとするされなかつただろう。だがそれは大きく異なった政治経済理論へとつながった。そしてその政治経済理論のうち、一部は都市部で行われる産業の重要性を強調し、あるものは地方部での産業の重要性を強調する。こうした理論は、学者の見解のみならず、君主や独立国の公共運営に対しても大きな影響力を持ってきた。第四巻でわたしは、こうしたさまざまな理論をできるだけ十分かつ明確に説明し、それが様々な時代や国々に与えた主要な影響についても解説しようとしている。

人々の集団としての収入がどうなっていたか、あるいはいろいろな時代や国において、そうした人々の年間消費分を供給した資金の性質を説明するのが、最初の4巻の目的だ。第五巻と六巻は独立国または連邦の歳入を扱う。この巻では、まず独立国ないし連邦で必要な歳出とは何かを示そうとしている。その歳出のうち、社会全体からの一般的な貢献によってまかなわれるべきなのはどれか、ごく一部の団体のみがまかなうべきなのはどれか、あるいは社会のごく少数のメンバーのみが負担すべきなのはどれかを示そうとした。第二に、社会全体が負担すべき支出を、社会全体から徴収する時に使えるさまざまな手法

を示し、それぞれの手法の主要なメリットと欠点を示している。最後の第三点としては、現代の政府はほとんどすべて、こうした歳入の一部を債務返済にあてたり、借り入れを行ったりしているが、その理由は何かを示している。そしてそうした債務が、真の豊かさ、つまり社会の土地と労働の年間産物に対してどんな影響を持っているかを示している。

第I部

労働の生産力向上の原因と、その生産物がいろいろな階級の人々に自然に分配される秩序について

第1章

分業について

労働の生産力や、それをどの方向にせよ導く上手さ、柔軟さ、判断力などのかなりの面で、いちばん大きな向上をもたらしたのは、分業の効果のようだ。

社会一般での分業の効果は、具体的な製造業でそれがどう機能するかを考えればわかりやすい。一般的な見方だと、分業を一番徹底的に活用しているのは一番つまらない産業だ。たぶん実際には、つまらない産業でそれが他の産業よりも大きく導入されているというわけではないのだろう。でもそういう、ごく少数の人々の小さな要求を供給するよう運命づけられた小製造業者では、作業員の総数はどうしても小さくなる。そして作業の各種部分で雇用されている人々が、みんな同じ作業所の中に集められることも多く、見るものがそれを一望に収めることができる。ところがこれが大製造業者となると、仕事で雇われる作業員があまりに多いので、それを同じ作業所に集めるのは不可能だ。一度に見られるのが、一つの作業部門の人員を超えることはほとんどない。つまりこうした製造業者でも、仕事は本当はもっと慎ましい製造業者よりたくさんの部分に区分されているのかもしれないけれど、その別れ方がはっきりとは見えず、したがってあまり認知されてこなかったのだろう。

だからとても小さな製造業者を例にとろう。でも例にとる製造業者は、分業が非常にしばしば認識されてきた業者、ピン製造業者だ。この業界（分業のおかげで確固たる産業となっている）に馴染みのない作業員や、そこで使われている機械（その発明にもたぶん分業が貢献したことだろう）の使い方に馴染みのない作業員は、最高の生産性を発揮したとしても、一日にほとんどピン一本すら作れないだろうし、どうがんばっても20本は絶対に無理だ。でもこの産業がいま実行されているやりかたと、この仕事全体が一つの業種であるばかりか、それがたくさんの作業に枝分かれしていて、その大きな枝もまた、一つの別個の業種になっている。一人が針金を引き出して、別の人がそれをまっすぎにして、三人目がそれを切り、四人目が先をとがらせ、五人目がてっぺんを研磨して針の頭がつくようにする。その頭を作るには、ちがった操作が三種類必要だ。その頭をつけるのも、独

自の作業だし、ピンを磨くのも別の作業だ。そしてそれを紙に挿すことでさえ、別個の仕事となっている。というわけで、ピンを作るという大事な仕事は、こんなふうにおよそ18個の別個の作業に分けられ、一部の製造工場ではそのそれぞれを別の人が行っている。中には同じ人がそのうち二つか三つをやることもあるけれど、この種の工場で小さなやつを見たことがあるけれど、そこで働いているのはたった10人で、だからそのうち何人かは二つか三つの別個の作業を担当していた。でも、かれらはとても貧しかったけれど、そして必要な機械に無差別に習熟していたけれど、かれらは頑張れば一日12ポンドくらいのピンを作れる。一ポンドには中くらいの大きさのピンが、4000本以上含まれる。つまりこの10人は、一日4万8千本以上のピンを毎日作ることができるわけだ。でもかれら全員が個別に独立して働いて、だれもこの商売でことさら訓練を受けていなければ、だれ一人として一日20本以上は作れないだろうし、一本も作れない人もいるだろう。これはまちがいがなく、各種の作業の適切な分業と組み合わせの結果として達成できているものの240分の1や、4800分の1ですらない。

その他のあらゆる技芸や製造業において、分業の効果はこの実に些末なピン作りと同水準だ。ただしそれらの多くでは、労働はこんなに細分化できなかつたり、こんな単純作業に還元できなかつたりはするけれど。でも分業が導入可能な場合には、それはあらゆる技芸において、労働の生産力をそれなりに高める。各種の業種や雇用の相互分離は、この利点の結果として生じたもののようだ。またこの分離は一般に、最高度の産業と改善を享受している国々において、最も進んでいるようだ。社会が野蛮な状態においては一人で行われる作業が、もっと向上した社会においては数人がかりの作業となることが多い。多くの先進的な社会では、農民は普通は農業だけに専念し、製造業者は製造業以外には手を出さない。どんな製品であれ、一つの完成品として生産するために必要な労働も、ほとんど必ず多くの人々に分割されている。リネンやウール製品の各部門では、いくつものちがった商売が雇用されている。綿花や羊毛を育てる人々、リネンの漂白とsmoothers、布の染色や仕立てを行う人々まで！ 農業は、確かにその性格からして、製造業に比べるとこれほどの労働分業が可能ではないし、各仕事同士をここまで完全に切り離すこともできない。牧場主と小麦農家の仕事の区別は、大工と鍛冶屋の仕事の差ほどは完全に分離できない。紡績業者は、ほぼまちがいがなく布を織る業者とはちがう人物だ。でも耕やす人、畝を作る人、種をまく人、小麦を取り入れる人は、同一人物であることが多い。こうしたちがった種類の労働機会は、一年の季節ごとにめぐってくるので、ある一人の人物が、年中このどれかの作業だけに雇われるのは不可能だ。農業において使われる、各種のちがった労働分野をすべて完全に分離できないということが、この分野における労働生産力の向上が製造業での向上に追いつかない理由なのかもしれない。最も裕福な諸国は、確かにその近隣諸

国と比べて、製造業でも農業でもはるかに高い成績をおさめている。でも、その格差がどちらのほうで大きいかと言えば、農業よりはむしろ製造業のほうだ。かれらの土地は一般に耕作状態もいいし、労働や費用をかけているので、地面の広さや自然の肥沃度から見て大量に生産する。でもこの生産量の優位性は、その労働と費用のかけ具合の多さとほとんど比例する程度に毛が生えた程度のものでしかない。農業では、豊かな国の労働は、必ずしも貧困国に比べそんなに多いわけではない。あるいは少なくとも、製造業で普通見られるほどの生産力の差を見せることはほとんどない。したがって、豊かな国の小麦は、同程度の品質でも貧困国に比べて安く市場に提供されるとは限らない。フランスはポーランドに比べて豊かさや進歩の面で優れているけれど、でもポーランドの小麦は、品質が同じだとしても、フランスのものと同じくらいの安さだ。フランスの小麦は、小麦の生産地では、イギリスの小麦と品質ではまったくひけをとらず、そしてほとんどの年では値段も同じくらいだ。でも豊かさや進歩の面で、フランスはイギリスより劣っているだろう。イギリスの小麦畑は、フランスよりも耕作状態がよいとされ、フランスの小麦畑はポーランドのものよりはるかに耕作状態がいいとされる。でも、貧乏な国は耕作状態が劣っていても、一部の尺度、たとえば小麦の安さや品質において、豊かな国と張り合えるのに、製造業の製品ではそんな競争ができるようなそぶりすらまったく不可能だ。少なくとも、そうした製造業が、その豊かな国の土壌、気候、状況にふさわしいものであれば、フランスの絹はイギリスのものよりも品質がよくて安い。それは絹の製造が、少なくとも現在の生糸輸入の高い関税のもとでは、フランスに比べてイギリスの気候には適していないからだ。でもイギリスのハードウェアと硬い羊毛は、フランスのものとはあらゆる点で比較にならないほど優れており、品質が同じならずずっと安い。ポーランドにはほとんどどんな製造業者もいないそうで、国の自給自足に不可欠いくつか粗悪な家内制手工業が例外的にあるだけだとか。

分業の結果として、同じ数の人々がこなせるようになる仕事量が大幅に増えたのは、三種類のちがった条件が効いている。まずは、個別の作業者それぞれにおける技能の増大、第二にある種の仕事から別の種類の仕事に移る時に通常無駄になる時間の節約、そして最後に、労働を支援して補い、一人が多数の仕事をつこなせるようにする、いろんな機械の発明だ。

まず、作業者の技能増大はまちがいなく、その人物のこなせる仕事量を増大させる。そして分業は、各人の仕事をたった一つの単純な作業に還元してしまい、その作業だけが人生で唯一の仕事にするので、その作業者の能力をまちがいなく大幅に高める。普通の鍛冶屋で、金槌の扱いには慣れていても釘を作ったことのない者がいるとする。それが何かの拍子に釘を作ることになったら、一日 200 か 300 本以上の釘は作れないだろうし、でき

た釘も劣悪なものとなるのは確実だろう。釘を作るのは慣れているけれど、でも唯一の仕事、あるいは主要な仕事は釘を作ることではない鍛冶屋なら、思いっきり専念したところで一日 800 本から 1,000 本しか作れないだろう。でも私は、釘を作る以外に何の仕事をしたこともない 20 歳以下の若者たちで、一日 2,000 から 3,000 本を上回る釘を作れる連中を知っている。とはいえ釘を作るというのは、そうそう単純な作業ってわけじゃない。同じ人物がふいごを吹いて、必要に応じて火を掻いたり焚きつけたりして、鉄を熱し、釘のあらゆる部分を作る。釘の頭を作るときにも、道具を換える必要がある。ピンや金属ボタンの製造がさらに分割される各種の作業は、それぞれずっと簡単なもので、一生涯それをやることだけに専念してきた人々の技能は、ずっと高いことが多い。こうした製造業の作業の一部が実施される速度ときたら、見たことのない人なら人間の手には習得不可能だと思えないレベルに達している。

第二に、ある作業から別の作業に切り替えるときに通常失われる時間をなくすことで得られるメリットは、一見して想像するよりもずっと大きい。ある作業から、場所もちがうし道具もぜんぜんちがうような別の作業にすばやく切り替えるのは不可能だ。田舎の織物師で小さな畑を耕している人物は、織機から畑に移動し、畑から織機に戻るのに、かなりの時間を無駄にしなければならない。その二種類の仕事と同じ屋根の下で実行できるなら、もちろん時間のロスはずっと少ないだろう。その場合ですら、ロスはかなりのものになる。一つの仕事から別の仕事に切り替えるとき、人は普通は手を休める。新しい作業についても、すぐには集中できないし専念もできない。いわば身が入らなくて、しばらくはきちんと仕事をするようりもあれこれ雑事をやる。手を休める習慣と、気乗りしない中途半端な作業の習慣は、生涯のほぼ毎日にわたり、作業や道具を 30 分ごとに換えて、20 通りもの作業をこなさなくてはならない田舎の労働者すべてが自然に、というか必然的に身につける作業態度であり、おかげでそういう人はほぼ間違いなく怠惰で怠け者で、とても緊急性の高いときにすら、精力的に身を入れてはたらくことができなくなっている。だからその人の技能という点でのハンデとはまったく関係なく、この一転だけでもその人がこなせる作業量は確実に大きく下がってしまう。

最後の第三番目に、適切な機械を使えばどれほど労働の手助けとなって手間が省けるかは、だれでも知っているだろう。だからここでは、労働を助けて手間を省く各種の機械は、もともと分業のおかげで生まれたようだ、と指摘するにとどめる。どんな目的の場合でも、人はあれこれ様々なことに関心が分散しているときよりも、その一つのことだけに専念しているほうが、それを達成するためのもっと簡単で優れた手段を発見しがちだ。でも分業の結果として、それぞれの人の関心はすべて、何か一つのとても単純な目的に集中することとなる。だから、それぞれの労働分野に雇用されている誰かしらが、やがてその

仕事をこなすもっと簡単に優れた手段を、その作業の正確として改善が可能なところでは見つけることが当然期待できる。労働がきわめて細分化されている製造業で使われている機械の相当部分は、もともとふつうの労働者の発明で、かれらはみんなごく単純な作業に雇われていたために、自然にその作業をこなすもっと簡単に優れた方法に頭が向いたのだった。こうした製造所をたくさん訪ねた人であれば、とてもきれいな機械をしょっちゅう見せられるだろう。そういう機械は、そうした作業員が自分の個別の作業部分を補助し高速化するために発明したものだったりする。最初の蒸気機関では、ピストンの上下に応じてボイラーとシリンダーとの間の管路を開けたり閉めたりするために、少年がずっと貼り付けられていた。こうした少年の一人は、仲間と遊ぶのが大好きだったので、機械の別の部分と、管路を開くバルブのハンドルとをひもで結ぶことで、バルブはこちらの手を借りなくても勝手に開いては閉じて、自分は遊び仲間のところに好き勝手に出かけられることに気がついた。この機械の発明以来最大の改良は、こういうふうにして、自分の手間を惜しんだ少年によって発見されたのだった。

でも、機械の改良のすべてが、その機械を使うチャンスのあった人々によるものでは決していない。多くの改良は、その機械を作ることがある商売の事業となったとき、その機械の作り手の工夫によって生じた。そして一部は、科学者や思索家と呼ばれる人によるものだ。こういう人たちの商売は、何をするわけでもなく、単にすべてを観察するだけだ。そして、その観察に基づいて、まるで縁遠い何の共通性もないもの同士のを結び合わせるができるのだ。社会が進歩するにつれて、科学や思索は他の各種仕事と同じく、ある特定の階級に属する市民の唯一の生業にして職業となる。そしてこれまた他の各種仕事と同じく、たくさんのちがった分野に枝分かれして、それぞれが学者の特定の集団や階級を擁することになる。そしてこの仕事の細分化は、他の各種仕事と同じく、技能を高め、時間を節約することになる。各個人はその独自の分野の専門性をどんどん高めて、全体としてもっとたくさんの仕事が行われ、学問の量はそれによってものすごく増える。

よく統治された社会で、普遍的な裕福さが人々の最も貧しい階層にまで広がる結果となるのは、分業の結果として各種各様の技芸における大幅な生産の増大のおかげだ。それぞれの労働者は、自分自身が消費するよりも自分の作業の産物をずっとたくさん提供できる。そして他の労働者もまったく同じ状況にあるので、かれは自分の作る財を大量に出して、他の人の作った大量の財、あるいは結局同じことだけれど、その人たちの作った大量のものを代償として交換できる。かれは、他のみんなに自分の作れるものをたっぴりと提供し、かれらはかれの使いたいものをたっぴりと提供し、そして全般に豊富さが社会の各種階層を通じて広がるわけだ。

文明化して繁栄している国で、どこにでもいるような職人や日雇い労働者の衣食住を見

れば、その人物にこの衣食住を提供するために一部（ものすごくわずかな一部とはいえ）が使われている産業で雇用されている人の数は、まったく数え切れないほどだということがわかる。たとえば日雇い労働者の身を覆うウールのコートは、粗雑でごわごわに見えるだろうけれど、でもものすごい数の労働者の共同作業の産物だ。羊飼い、羊毛の選別人、羊毛を梳く人、けばだて職人、染め師、あらずき職人、紡ぎ人、織り師、縮充工、仕立屋などが、その他多くの人々とともに、みんなそれぞれのちがった技芸を結集しなければ、こんな慎ましい産物さえもできない。さらにしばしば田舎の僻地に住んでいるこうした職人の一部から別の職人へと材料を運ぶのに、商人や輸送人が何人雇用されたことか！ 商人や輸送人、さらには造船人、水夫、帆の製造者、縄の製造者などが、染め師の使う世界のものすごい僻地からくる薬物を運ぶのに何人かり出されたことか！ こうした労働者の一番つまらぬ者が使う道具ですら、作るのにどれほど多様な労働が必要だろうか！ 水夫たちの船、縮充工の紡績機、あるいは織り師の織機のような複雑な機械などは言うまでもないので、ここでは羊飼いが羊毛を刈り取るハサミというとても簡単な道具を作るのに、どれだけ多様な労働が必要かを見てやることにしよう。鉱山の採掘人、溶鉱に必要な炉を作る職人、燃料の材木の販売者、溶鉱炉で使われる炭を焼く人、煉瓦職人、煉瓦を積む職人、炉の番をする労働者、水車大工、鍛冶職人、鍛冶屋、こうした人々のすべてが、ハサミを作るにはそれぞれの技能を発揮しなくてはならない。同じようにして、この日雇い労働者の服や家具のそれぞれの部分を検討したらどうだろう。たとえば肌身にまとったごわごわのリネンのシャツ、足を覆う靴、横たわるベッド、そしてそれを構成する各種の部品、食べ物を調理する台所の火格子、かれがそのために使う石炭（地の底から掘り出され、長い海路と陸路で運ばれてきたもの）、その他台所用品のすべて、テーブルのすべての食器、ナイフとフォーク、食物を盛りつけて取り分ける陶器や錫製の皿、パンやビールを造るのに使われた各種の人手、熱と光を通し、寒気と雨を閉め出すガラス窓を作るのに使われた人手や、こうした北方の地ではそれなしには決して快適な暮らしができなかったであろうガラスという美しくもすばらしい発明を用意するために必要とされた知識と技能、さらにはこうした便利なものを作るのに使われた各種労働者の道具まで、同じように検討してみよう。これらをすべて検討して、それぞれにどれほど多様な労働が使われているかを考えてみれば、何千人もの支援と協力がなければ、文明国の最も慎ましくもやさしい人物ですら、通常暮らしている慎ましく単純なものとわれわれが誤解している暮らしぶりの水準ですら、生きてはゆけないのだということに気がつくはずだ。もちろん、偉大な人々のもっと豪華な贅沢に比べれば、かれの暮らしは実に単純で慎ましい。それでも、ヨーロッパの君主と勤勉で質素な百姓とを比べたときの暮らしぶりの差は、何万人もの裸の野蛮人たちの生命と自由を絶対的に支配する多くのアフリカの王さまとの暮らしぶりをその百姓の暮らしぶ

りがどれほど上回っているかという差に比べれば、それほど大きくはない可能性だってある。

第2章

分業をもたらす原理について

こんなにたくさんの長所が生じる分業というのは、もともとだれか一人の知恵が、それのもたらす普遍的な豊かさを予見して意図して導入した結果ではない。それは一見するとまるでそんな広範な効用を持っていない、人間のある性質の、きわめてゆっくりで段階的とはいえ、必然的な結果なのだ。その性質というのは、いろいろなものを交易、交換、取引するという性質だ。

この性質というのは、人間の原初的な性質の一つで、それ以上は分析不可能なものなだろうか。それとも、それは理性と発話という能力の必然的な結果なんだろうか。後者のほうがありそうだけれど、でもそれがどっちであるかはここでの検討の範疇ではない。それは全人類に共通だし、ヒト以外のどんな生物種にも見られず、また動物界には他に契約をするどんな種も見つからないようだ。同じウサギを追いかけるグレイハウンド二匹は、時ににやら協調した行動のような振る舞いはする。お互いがウサギを相手のほうに追いやり、そして相手がウサギを自分の方に追いやったら、それを引き受けようとする。でもこれは別に何か約束あつてのことじゃなくて、その時点において両方が同じ獲物に情熱を向けていたために起きた偶然の一致でしかない。だれもイヌが、自分の骨を別のイヌの骨と公明正大に交換するような契約を交わしているところなんか見たことはない。動物が仕草や自然な鳴き声を通じて、他の動物に「これはオレのでそれはおまえの、そっちをくれればこっちをあげよう」と宣言するところを見たことがある人もいない。動物は、人や他の動物から何かを手に入れたい時には、その必要とするサービスを握っている相手の好意を惹く以外に説得方法はない。子イヌは母イヌにじゃれてみせ、スパニエルは食卓のご主人からエサがほしいときには、何千という歓心を得るための仕草をやつてのける。人も、自分の仲間相手に同じ手口を使うし、自分の希望通りに相手を動かす手段が他になければ、卑屈な媚びた歓心を買うための振る舞いを試してみる。でも、あらゆる場合にこれを実行できるほどの時間はない。文明社会では、常にものすごい数の人々の協力と支援が必要だし、一方で人の一生は短すぎてほんの数人しか友達にはなれない。ヒト以外のほとん

どすべての動物種では、その動物が成獣になれば完全に自立するし、その自然状態ではほかの生き物から何の支援も必要としない。でもヒトは絶えず同胞の支援を必要としているので、博愛だけでそれを得ようとしても無駄だ。他人の自己愛を自分に有利なように惹きつけ、自分が求めることをしてくれればあなた自身のためになるんですよ、と示せばずっと生き延びやすい。他人にどんなものでも取引を持ちかけるヒトはすべて、これを提案しているわけだ。わたしの求めるものをくださいな、そうすればあなたが欲しいこれが手に入りますよ、というのが、そうした申し出すすべての意味だ。そしてわれわれが必要とする事物のうち、相当部分を他人から得るのはまさにこのやり方を通じてのことだ。夕食が期待できるのは、肉屋や酒屋やパン屋の博愛のおかげではなくて、かれらが自分の利益に留意するからだ。われわれはかれらの人間性ではなく自己愛に訴え、かれらに話すのはわれわれ自身のニーズのことではなく、かれらにとっての利益の話だ。同胞市民の博愛にもっぱら頼ろうとするのは乞食だけだ。そして乞食でさえ、それだけに頼ったりはしない。乞食は裕福な人々の慈善に全面的に頼って生き延びている。でも、このやり方が最終的には必要な生活必需品をもたらしているにしても、その乞食の必要にあわせてそれが都合よく提供されるはずもないし、実際にそんなことにはなっていない。乞食であっても必要物の大部分は、他の人々と同じようにして手に入れる。つまり取引や交換や購入によってだ。ある人にもらったお金で、乞食は食べ物を買う。別の人にもらった古着は、もっと自分に適した服やら宿泊やら食料やらお金と交換し、そのお金を使って乞食は必要に応じ、また食べ物や衣服や宿泊を買える。

お互いにとってよい必需品を手に入れる方法の大部分が取引や交換や購入によるものだし、そもそも分業をもたらしたのも、人間の取引をするという性質だ。狩人や羊飼いの部族で、ある人物がたとえば他のだれよりも上手に弓矢を作るかもしれない。かれはしばしばその弓矢を、仲間の家畜や肉と交換することになる。そしてついに、自分で野原に出て狩りをするよりも弓矢と交換したほうが、もっと家畜や肉を手に入れられることに気がつく。自分の利益を考えるが故に、弓矢を作るのがその人の主な仕事となって、かれはいわば武器屋になるわけだ。別の人、部族のテントや移動式住居の枠組みや覆いを作るのに秀でている。それを作ることで近所の役にたち、そしてその報酬に同じように家畜や肉を代わりに得るようになり、やがてこの仕事に専念するほうが自分の利益になることに気がついて、一種の家大工になるわけだ。同じように、三人目は鍛冶屋や真鍮細工師になり、別の人、革職人や毛皮の服屋（毛皮や革は、野蛮人の衣服の主要部分を占める）となる。こんなふうに、自分の労働のうち、自分自身の消費できる以上の余った部分をすべて、他の人の労働のあまりで自分の必要なものと交換できるということで、すべての人はそれぞれ特定の仕事に専念するようになり、その商売において自分が持っている才能や天

与の才を育み完成させようと努力することになるわけだ。

実際のところ、各人の自然な才能の差なんて、みんなが思っているほど大したものじゃない。そして達人の域に達した各種職業の人同士を隔てるように見える、ものすごい才能の差というのは、多くの場合は分業の原因というよりは、その結果なのだ。まるで共通点のない人々、たとえば学者と町の赤帽のちがいは、天性によるものよりは、習慣や慣行、教育によるものだ。生まれ落ちたとき、そしてその後6年から8年にかけて、かれらはたぶん似たり寄ったりだったし、その親たちだって遊び仲間たちだって、大したちがいは見て取れなかつただろう。でも6歳から8歳、またはその直後くらいに、その子たちはちがった仕事に就く。そのときはじめて才能の差が認識されて、どんどんそれが広がり、やがて学者の高慢ぶりはそこに何か共通点があったことさえ認めたらなくなる。でも取引、交換、交易しようという性向がなければ、すべての人は自分の欲しい生活上の必需品や便利な品を自分であつらえるしかない。全員が同じ作業をこなすしかなくて、同じ仕事をするしかなく、才能の大幅なちがいをなんかもたらせるような、職業上の差だってあり得なかつただろう。

ちがった職の人同士でかくも異なる才能のちがいを形成するのは、この取引性向であり、そしてそのちがいを役にたつものとしているのも、この同じ性向だ。同じ種に属するとされる動物の族同士は、習慣や教育で人々の間に生じるとされるちがいよりもはるかにすさまじいちがいを自然に生み出しているようではある。天性から言えば、学者は町の赤帽と比べて、才能的にも志向的にも、グレイハウンドとマスチフ犬のちがい、あるいはグレイハウンドとスパニエル犬のちがい、あるいはスパニエル犬と牧羊犬のちがいの半分もちがっているわけじゃない。でもこうした動物のちがった族は、同じ種に属してはいるけれど、お互いにはほとんど何の役にも立っていない。マスチフ犬の強さは、グレイハウンドの素早さにまるで支援されることはないし、スパニエルの機敏さや牧羊犬の従順さからも何も得るところはない。こうしたちがった能力や才能の効果は、交換交易能力や性向がないために、共通のストックに沽券できず、種全体の充足や便宜にちっとも貢献しない。それぞれの動物は、やっぱり個別に独自に自分で食料を得て身を守るしかなくて、自然がその仲間たちに別々に与えた、才能の多様さから何も便益を引き出すことがない。一方の人間の愛だでは、それとは逆に、まるっきりちがった才能が相互に役にたつ。それぞれの能力がもたらす別々の産物が、交易、交換、取引への一般的志向のために共通の場にもたらされて、そこでだれもが自分の必要に応じて、他人の能力が生み出したものの一部を買うことができる。

第3章

分業は市場の規模によって制約される

交易の力は分業をもたらすけれど、一方でこの分業の進展はその力の範囲によって制約されてしまう。言い換えると、市場の規模によって制約される。市場がとても小さければ、だれも一つの職業に専念しようという気にはならない。自分自身の消費できる範囲を超えた、自分の労働の産物を、他人の労働の産物で必要なものの余剰部分と交換できないからだ。

一部の産業は、きわめて低級な産業であっても、大都市でしか実施できない。たとえば赤帽は、大都市以外では仕事もないし食べてもいけない。村は赤帽にはあまりに狭すぎる。そこらの市場町でさえ、絶えず仕事が見つかるほど大きいことは珍しい。スコットランドのハイランドのような人のいない田舎で、一軒家やとても小さい村が散在しているだけのところでは、すべての農夫が自分の一家の肉屋、パン屋、醸造屋を兼ねなきゃいけない。こういう場合には、鍛冶屋だろうと大工だろうと煉瓦職人だろうと、同じ職業の人が30キロ以内にいる見込みはほとんどない。最寄りのご近所でさえ10キロから15キロも離れて住んでいる家族は、ものすごい小さな仕事のあれこれを自分でこなすことを学ぶ必要がある。そういう作業はもっと人口の多い地域では、そうした専門職人の助けを借りることになるだろう。田舎の労働者はほとんどどこでも、使う材料が同じという程度の親和性しかないありとあらゆる職業分野に手を染めざるを得ない。田舎の大工は、木でできたものならなんでも扱う。田舎の鍛冶屋は、鉄でできたものならなんでも扱う。前者は大工であるばかりか、指物師でもあり、箆笥職人でもあり、木彫り細工師ですらあって、さらには車輪職人だったり鋤職人だったり、馬車やワゴン製造者だったりすらする。鍛冶屋の仕事となると、さらに多様になる。スコットランドのハイランド地域では、釘屋という程度の仕事すらあり得ない。そうした労働者は、一日釘を千本作り、年間300日働くので年間30万本の釘を作れる。でもこんな環境では、年間に千本の釘、つまり一日分の釘さえ

も売りさばけないだろう。

水上輸送によって、陸上輸送だけで可能なよりもずっと大きな市場があらゆる産業に対して解放されるので、あらゆる産業が自然に細分化されて改善されるのも、海沿いや航行可能な川沿いになるし、そうした改善が内陸部にまで拡大するのは、ずいぶん後になってからのことになる。乗員が二人ついて、馬八頭が引く幅広輪の馬車は、六ヶ月かけてロンドンとエジンバラの間で4トンの品物を積んで往復する。同じ時間で、6人から8人の乗員を持つ船は、ロンドンとリースの港の間で200トンの品物を積んで往復することも多い。つまり6人から8人は、水運の力を借りることでロンドンとエジンバラの間で、同じ時間で幅広輪の馬車50台分、乗員100人分、馬400頭分に匹敵する量の品物を運ぶわけだ。つまり、ロンドンからエジンバラの一番安い陸運で運ばれる品物は、100人三週間分の維持費、そして馬400頭と巨大な馬車50台の維持費のみならず、維持費と同じくらいの消耗損傷費用を輸送費の中で負担しなくてはならないということだ。一方、同じ量の品物を水運で運べば、6人か8人の維持費と、積載量200トンの船の消耗損傷費用、さらにリスクが高くなる分の価値、あるいは陸運と水運との保険料の差を負担することになる。だからこの二ヶ所間の輸送手段が陸運しかなければ、重さに対してかなり高い値段がつくような品物でないと運べないので、現在この両都市間で営まれているよりもはるかに小さな規模の商業しか営めず、結果として現在それぞれの都市が、相手の都市に対して相互に提供できている事業機会に比べるとごくわずかしが提供できない。世界の離れた地域同士では、どんな商業だろうとほとんど、あるいはまったくあり得ないことになってしまうだろう。ロンドンとカルカッタの間の陸運コストを負担できるような品物なんてあるわけがない。あるいはこれだけの費用を負担できるほどの貴重品があったとしても、あれだけ野蛮な国がいろいろある中を、まともに安全に運べるわけがあるのか？ でもこの二都市は、いまお互いにかんりの商業を行っているし、お互いに市場を提供することで、お互いの産業を大いに奨励しているわけだ。

というわけで水運のメリットはこんなに大きいから、技術や産業における最初の改良が真っ先に起きるのも、こうした設備があらゆる種類の労働の産物に対し、全世界を市場として開いてくれる場所なのは自然なことだし、それが内陸部に広がるのがずっと遅いのも当然のことだ。国の内陸部は、自分の品物の大部分について、自分と沿海部や航行可能な大河とを隔てる周辺地域しか市場がない期間がとて長い。だからかれらの市場は長いこと、そうした国の富や人口の多さに比例せざるを得ず、結果としてかれらの発展は、そうした地域の発展より後にならざるを得ない。イギリスの北アメリカ植民地では、プランテーションは常に沿海部か航行可能な河川の沿岸に沿って広がり、これらからある程度以上離れたところにはほとんど広がっていない。

最高の公認歴史によれば、初めて文明化された国々は地中海沿岸に位置していた国々だったようだ。地中海は、世界で機知のた委細の内海であり、潮もなく、だから風で起こる以外の波もなく、だから海面の穏やかさと、島の多さと、岸がどこからでも近いこともあって、世界の航海技術の草創期には実に具合がよかった。当時、まだ方位磁針が知られていなかったのも、人は陸の見えないところに出るのを怖がったし、造船技術も未熟だったので、大洋の荒波に身を任せるのも怖がった。ヘラクレスの巨柱を越えて進む、つまりジブラルタル海峡から外に出るのは、古代世界では長いこと、航海技術の最先端できわめて危険な応用と思われていた。あの古代における最も技術の高い航海者たちにして造船者だったフェニキア人やカルタゴ人ですら、それを試みたのはずいぶん後になってからで、その後もかなりの長きにわたって外洋航海を行ったのはこの二カ国だけだった。

地中海沿岸諸国のうち、農業や工業がどっちもある程度のところまで発達して改良されたのは、エジプトが最初だったようだ。エジプト上流部は、ナイル川から数キロ以上離れて広がることはまったくないようだし、エジプト下流では、あの大河が多数の運河に別れ、ちょっとした技術の適用で大都市間のみならず大きな村同士すべての間でも、さらには田舎の農家の多くでさえ水運による輸送が可能になっている。これはライン川やメーセ川がいまオランダでやっているのとほとんど同じだ。この内陸部の航海の範囲の広さと容易さこそが、エジプトで早い時期に発達が生じた主要原因の一つだろう。

また農業と工業での改良は、東インドのベンガル地方や中国の東部地域の一部でもはるか古代から生じていたようだ。ただしこの古代史のかなりの部分は、世界のわれわれのいる部分でよく保証されているような歴史では裏付けられていない。ベンガル地方ではガンジス川と、その他何本かの大河が、エジプトでのナイル川と同じように、航行可能な多数の運河を造っている。中国東部地域でも、何本かの大河がいろんな支流によって無数の運河を造り、運河を渡ることでナイルやガンジス、あるいはこの両者をあわせたよりはるかに大規模な内陸移動が可能になっている。古代エジプト人や古代インド人、あるいは古代中国人のどれも外国貿易を奨励しなかったというのは驚くべきことだが、でもいずれもこの内陸航海からその大いなる繁栄を導き出した。

アフリカ内陸部のすべて、そして黒海やカスピ海よりある程度以上北の地域、つまり古代スキタイ、現在のタタール地方とシベリア地方は、この世のあらゆる歴史を通じて、現在見られるのとまったく同じ、野蛮で非文明的な状態にあったようだ。タタール海は船が航行できない凍った海だし、この地域には世界最大の川がいくつか流れてはいるけれど、それぞれはあまりに離れすぎていて、その大部分は商業や交易を運んだりできない。アフリカには、ヨーロッパのバルト海やアドリア海や、ヨーロッパとアジアの両方にまたがる地中海や黒海、そしてアジアにおけるアラビア湾やペルシャ湾、インド湾、ベンガル湾、

シヤム湾のような大きな内海は一つもなく、あの大陸の内部に海洋貿易をもたらすことができない。そしてアフリカの大河はお互いに離れすぎている、一定以上の内陸航行を生み出せない。大量の支流や運河に分岐しないような川、そして海に到達するまでに他の領土を通過する川に沿って展開できる商業は、どんな国であっても決して大したものにはなれない。というのも、その他の領土を握っている国々は、常にその上流の国と海との輸送を妨害する力を持つことになるからだ。ドナウ川の航行は、ババリア、オーストリア、ハンガリーの各国にとってあまり役に立たないけれど、そのどれか一カ国が黒海に流れ込むまでのその流域すべてを掌握していたら、状況はかなりちがうだろう。

第4章

お金の起源と使われ方

いったん分業が十分に確立したら、人は自分のニーズのごく小部分しか自分では供給できなくなる。ニーズのずっと大きな部分は、自分の労働産物で、自分が消費する分以上に余った部分を、自分が必要とする他人の労働産物の同じようなあまりと交換することで入手する。つまりあらゆる人は交換によって生きるわけで、つまりみんなある意味で商人となり、そして社会そのものが文句なしの商業社会へと発展する。

でも分業が最初に起こり始めたときには、この交換の力は実際の運用面でかなり障害の多い不満なものだったことがとても多かったはずだ。たとえばある人が、ある品物を自分自身で必要な量よりも多く持っていて、ある人が必要量より少ししか持っていなかったとしよう。結果として、前者はこの余りをよるこんで処分したがるし、後者はそれを喜んで買ったがる。でも後者がたまたま、前者の必要とするものを何も持っていなかったとしたら、両者の間では何も交換は生じない。肉屋は自分で消費できるよりたくさんの肉を店に抱え、パン屋とビール屋はそれぞれその一部を買いたいと思う。でもかれらは、自分たちの個別の商売の産物以外に提供できるものがなくて、肉屋はとりあえず消費するのに十分なだけのパンもビールも持っている。この場合、この人たちの間では交易は起きない。肉屋は売り手になれないし、残り二人は買い手になれない。だからかれらは相互に、お互いに対してサービスを提供できる能力が下がる。こんな不便な状況を避けるためには、分業が確立した後の社会のあらゆる時代において、まともな人であればすべて、常時手元に自分の産業の固有の産物以外にの何かある商品か何かを手元に置いておくような形に身边を整えようとするのが当然だ。その品物は、各種産業の産物と交換で受け取るのを拒否する人がほとんどいないだろうとかれが考えるような商品でなきゃいけないわけだ。

おそらくは、この目的のために数多くのいろんな商品が、次々に考案されては利用されてきただろう。野蛮な時代の社会では、商業の共通の道具としてウシが使われたそうだ。たぶんそれはずいぶん不便だったろうけれど、でも古代ではいろんなものがしばしば、その対価として与えられたウシの数で価値を計られていた。ホメロスによれば、ディオメデ

の甲冑は雄牛 9 頭分の値打ちしかなかったという。でもグラウクスの甲冑は、雄牛 100 頭分だったそうだ。アビシニアでは、商業と交換の共通の道具として塩が使われるという。インド沿岸の一部では、ある貝の一種だ。ニューファウンドランドではタラの干物。ヴァージニアではタバコ、西インドのわれら植民地の一部では砂糖、他の国では毛皮や皮革、そして聞くところによれば今日ですら、スコットランドのある村では労働者がパン屋やビール酒場に向かうときには、お金の代わりに釘を持って行くことが珍しくないとか。

でもすべての国で、人は最終的にはこの仕事を任せる対象として、他のどんな商品よりも金属を愛好することになったようだ。金属は他のどんな商品にくらべてもほとんど目減りすることなく保存できるのみならず、いくらでも目減りせずに分割できるし、溶接すれば二つの部分をくっつけるのも簡単だ。これは他の同じく耐久力のある商品がまったく持たない性質だし、この性質は他のどんな性質よりも、金属を商業と流通の道具となるのにふさわしい存在にしている。たとえば塩を買いたくて、交換に出せるものが家畜しかない人は、たぶんウシ 1 頭分の塩か、羊一頭分の塩をまとめて買うしかなかっただろう。それ以下の量はまず買えなかったはずだ。というのも、交換に渡すものを損失なしに分割することがまず不可能だからだ。そして一頭分より多く買いたいと思ったら、同じ理由で二倍の量とか三倍の量を買わなきゃならないはずだ。つまり雄牛 2 頭や 3 頭分、あるいは羊 2 匹か 3 匹分に相当する価値分だけ買うことになる。さて、もしそうではなくて、羊や牛のかわりに交換に金属を渡せたら、かれは自分がその時必要とするその商品の正確な量にあわせて、金属の量を簡単に切り分けられる。

この目的のために使われる金属は、それぞれの国によって違う。古代スパルタ人の間では、鉄が共通の装置となった。古代ローマ人の間では銅、そしてすべての豊かな商業国では黄金と銀だ。

こうした金属はもともと、延べ棒の形で利用されていて、特に刻印も貨幣化もされていなかったようだ。だからピレニウスが古代の歴史家ティマイオスの権威に基づいて述べるところでは、Servius Tullius の時代まで、ローマ人は硬貨の形でのお金を持たず、刻印のない銅の棒をつかってなんでも必要なものを買ったそうだ。つまりこういう延べ棒が、当時はお金の機能を果たしたことになる。

この延べ棒状態での金属の利用には、とても大きな不便さが二つつきまとう。まず、重さを量るという面倒。そして二番目に評価するという面倒。貴金属では、少量のちがいが大きな価値の差を生み出すので、適切な精度で重さを量るという仕事ですら、少なくともきわめて正確な秤と分銅を必要とする。特に黄金を図るのはかなりの精密さを要する作業だ。卑金属だと、確かに多少の差でも大したちがいはならないし、だから必要な精度も下がる。それでも、貧乏な人が一ファージング（訳注：お金の単位。今の感覚で 1 円、と

でも思って)ほどの値打ちの品物を売り買いする必要があるとき、そのファージング分を
図らなきゃいけないならえらく手間だ。評価の作業はそれよりもっとむずかしく、もっと
面倒で、その金属の一部が坩堝で適切な溶媒と共に十分に溶かされない限り、評価から引
き出される結論はきわめて不確実なものだ。でも硬貨型のお金という精度の前は、この面
倒で難しい手間をかけない限り、人々はすさまじい詐欺やインチキに会うかもしれず、自
分の商品の対価として純銀や純銅一ポンド重量のかわりに、卑しく安物の材料を混ぜ合わ
せて外見だけそうした金属に似せたものを受け取ることになったかもしれない。こういう
濫用を避け、交易を支援して、その結果各種の産業や商業を奨励するためには、その国で
通常ものを買うのに使われている実際の金属の一定量に公的な刻印を押すことが必要だ
というのは、事態をある程度以上改善しようとしたすべての国で必要とされたことだった。
これが貨幣型のお金の起源であり、造幣局と呼ばれる公的機関の起源だ。これらの機関
は、羊毛やリネン生地の aulnagers や stampmaster とまったく同じ性質の機関だ。どれ
もみんな、公的な刻印という手段で市場に持ち込まれるこうした商品の量と均一な品質を
確実にしているわけだ。

この種の流通金属に押される公的刻印として最初のもは、多くの場合は最も確認が難
しくて重要な、金属の良質さや純度を保証することを意図して作られたもので、現在の銀
板や銀のべ棒に押されるスターリング印や、黄金のインゴッドに時々押されるスペイン院
と似たもので、金属の一つの面だけに押されて表面全体を覆ったりはせず、金属の純度は
保証しても重量は保証しなかったようだ。アブラハムはエフロンに対し、Machpelah の
畑の対価として合意した 400 シェケルの銀を量って渡す。でもそれは、商人の流通用のお
金だと述べられているのに、金額ではなく重量によって受け取られている。現在、黄金の
インゴッドや銀の延べ棒で行われているのと同じだ。イングランドの古代サクソン王たち
の収入は、お金ではなく物品払い、つまり食料や各種支給品で支払われていたという。征
服王ウィリアムが、お金で支払う習慣を導入した。でもこのお金はずいぶん長いこと、国
庫から金額ではなく重量をもとに払い出されていた。

こうした金属を正確に量るのが不便でむずかしいために、硬貨という制度が必要になっ
た。ここでは刻印が金属片の両面全体を覆い、ときには縁も覆う。これは金属の純度だけ
でなく重さも保証するものとされていた。こうした硬貨は、したがって、現在と同じよう
に金額で受け取られ、いちいち重さを量る手間が要らない。

こうした硬貨の単位は、どうやらもともとはそれに含まれた金属の重さや量を表現して
いたようだ。ローマで初めてお金を硬貨にした Servius Tullius の時代では、ローマ・ア
スまたはポンドは、良質な銅をローマポンド重量だけ含んでいた。それはイギリスのトロ
イス・ポンドと同じように、12 オンスに分割され、書くオンスには本当に良質の銅が 1

オンス重量含まれていた。イギリスのポンド・スターリングは、エドワード一世の時代には、明確な純度の銀を一ポンド（タワー尺重量）含んでいた。タワー尺ポンドは、ローマポンドよりもちょっと多かったようで、トロイ・ポンドよりは少なかったらしい。この最後のやつは、ヘンリー八世の18世紀になるまでイングランドの貨幣鑄造には導入されなかった。フランスのリーブルは、シャルルマーニュの頃には、明確な純度の銀をトロイ重量で1ポンド含んでいた。シャンパーニュのトロイーは、当時はヨーロッパのあらゆる国から人が集まっていたので、こんなに有名な市場の度衡尺はよく知られていたし尊重もされたわけだ。スコットランドのお金のポンドは、アレクサンダー一世の時代からロバート・ブルースの時代に至るまで、イングランドのポンド・スターリングと同じ純度と重量の銀を含んでいた。イングランド、フランス、スコットランドのペニーもまた、どれもオンスの1/20と一ポンドの240分の1を含んでいた。シリングもまた、もともとは重量の単位だったようだ。ヘンリー三世の古いおふれにはこうある；「小麦がクォーターあたり12シリングであるときには、ファージングのwastelパンは、11シリングと4ペンスの重量であること」。でも、シリングとペニー、またはシリングとポンドとの比率は、ペニーとポンドの比率ほどは一定で均一ではなかったようだ。フランスの王たちが最初に覇権を争ったとき、フランスのソウまたはシリングは、その時々に応じて、5ペニーだったり、12ペニーだったり、20だったり40だったりした。古代サクソン人の間では、シリングはある時はたった5ペニーで、それがご近所の古代フランク人たちと同じく、かれらの中でもかなり変動したことは十分考えられる。フランスのシャルルマーニュの時代以来、そしてイングランドでは征服王ウィリアムの時代以来、ポンド、シリング、ペニーの比率はいまと同じでどこでも一定だったようだが、それぞれの価値は大きくちがっていた。それはなぜかというと、思うに世界のあらゆる国で、王や主権領土は強欲や不正のため、臣民たちの信頼を悪用して、だんだんもともと硬貨に含まれていた金属の本当の量を減らしていったからだろう。ローマのアスは、共和国の後期になると、元の価値の24分の1にまで減ってしまったし、重量も1ポンドだったのが、半オンス（訳注：ポンドは450g、半オンスは14gくらい）の重さしかなくなった。イングランドのポンドとペニーは、現在ではたった1/3くらいしか含んでいない。スコットランドのポンドとペニーはもとの価値の1/36くらい。そしてフランスのポンドとペニーは、もとの価値の1/66ほどだ。こうした手口によって、これを行った王や主権領は表面上は負債を支払って、もともと必要だったのに比べて少ない量の銀で約束を果たせた。でもこれは、まさに表面上だけのことだ。というのもその債権者たちは、支払われるはずだったものの一部をごまかされたことになるからだ。その国の他の借り手たちもすべて、同じ特権を認められて、自分たちが昔の硬貨をもとに借りた金額を、新しい改鑄された硬貨で同じ名目金額だけ返済することが

認められた。つまりこういう手口は、いつも借り手のほうに有利で、貸し手にとっては破滅的であり、時にはそのために、ものすごい公共的な不穏事態で生じるよりも個人の運命にとって大幅で広範な変動を引きおこしている。

このようにして、お金はあらゆる文明国で、商業の普遍的な道具となり、それが介入することであらゆる種類の財が売買されたり交換されたりしている。

これから検討するのは、人々が財をお金や他の財と交換するときに、どんな規則に自然にしたがうか、ということだ。こうした規則は、財の相対価値、または交換価値と呼ばれるものを決める。

「価値」という言葉は、二つのちがった意味を持つことがわかる。時にそれは、ある具体的なものの効用をあらわし、そしてある時にはそのものの所有が意味している、他の財を購入する力をあらわしている。前者は「利用の価値」、後者は「交換の価値」と呼べる。利用価値がとても大きいものが、しばしば交換価値は小さかったりゼロだったりする。そして逆に、すさまじい交換価値を持つものが、しばしば利用価値は小さいかゼロだったりする。水より役にたつものはない。でも水ではほとんど何も買えない。水と交換で得られるものほとんどない。逆にダイヤモンドは、利用価値はほとんど何もない。でもそれと交換で、他の財を大量に入手できることが多い。

財の交換可能な価値を律する原理を検討するために、以下のことを示してみたい：

1. まずこの交換可能な価値の真の尺度は何か、あるいはあらゆる財の本当の価格は何ではかればいいのか。
2. 次にこの本当の価格を構成・形成するいろんな部分には何があるだろう。
3. 最後に、こういう価格の構成部分の一部またはすべてを、その自然水準または通常水準以上に引き揚げ、時に引き下げる条件というのは何だろう。つまり、ときどき財の市場価格つまりは財の実際の価格が、その自然価格とも言うべきものときっちり一致しない原因は何だろう。

この三つの主題について、続く三章でなるべく完全かつはっきりと説明してみたい。そしてそこでは読者の辛抱強さと注意力を心からお願いする。ときには無用なほどくどくど思われる細部を検討するだけの辛抱強さと、私にできる限りの完全な説明の後でも、まだいささか不明確と思われるかもしれないものを理解するための注意力だ。明瞭であるためには、わたしは常にくどくなるのを辞さない。そして明瞭であろうと最大限の苦労を重ねた後でも、本質的にとても抽象的なテーマである以上、多少の不明点はまだ残るだろう。

第5章

商品の本当の価格と名目の価格、あるいは労働での価格とお金での価格

すべての人は、人間生活の必需品、便利な品、娯楽をどれだけ享受できるかという度合いに応じて、豊かだったり貧乏だったりする。でも分業が十分に生じた後では、人が自分の労働で用意できるのは、その中のごく一部でしかない。そのずっと多くの部分は、他の人の労働から手に入れなくてはならないし、だからその人は、自分が自由にできる労働の量に応じて、あるいは購入できる労働の量に応じて、豊かだったり貧乏だったりする。だからあらゆる商品の価値は、その商品を持っていて、それを自分で使ったり消費したりするつもりがなくて、他の商品と交換するつもり的人物にとっては、それによって購入したり自由にしたりできる労働の量に等しい。だから労働量は、すべての商品の交換価値の真の尺度だ。

訳者あとがき

はじめに

これはアダム・スミスの『An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations』の全訳(になるはずのもの)だ。いわゆる「The Wealth of Nations」、国富論で、原著は1778年に出てから、1780年代を通じて何回か改訂されている。底本としては、特に決まったものではなくて、Penguin Classicsのものを使ったり、Dover版を使ったり、ネット上にあるものを使ったり、いろいろだ。特に底本を限定しないのは、ぼくが目指しているのがそんな厳密な代物ではないからだ。そういう書誌的なことをこちゃこちゃ研究している人は、原文をさがして読めばいい。こんな翻訳なんかに頼ってるんじゃない！ぼくは、初版と第二版とで多少の加筆があろうがなかろうがどうでもいい普通の人を対象にこの翻訳をしている。いろんな版をみて、そういう人がいちばん興味を持ちそうなところ、興味をもつべきところを考えて訳している。

題名と翻訳について

さてこの本はもちろん経済学の古典だ、というか、この本で経済学がはじまったようなものだ。だから、これは何度か訳されているのだ。が……それらの翻訳の多く、日本の歳寄りたちの、理解しがたい風習にとらわれている。

Nation というのを「国民」と訳す、という変な風習だ。

たとえば岩波文庫(昔の)ではこの本は「諸国民の富」という題名になっている。Wealth of Nations で、Nations を諸国民と訳したわけだね。

ところが序文をちょっと読んだだけで、本書 Wealth of Nations の題名に出てくる「Nations」というのが国のことであって、国民のことではないというのはすぐにわかる。「諸国民の富」というのは、だからタイトルからして明らかにまちがっているんだ。

たとえば冒頭の一文。

The annual labour of every nation is the fund which originally supplies it with

all the necessaries and conveniences of life it annually consumes.

さて、もしこれが国民なら、どうしてスミスはこれを it という非人称の代名詞で受けるの？

Whatever be the soil, climate, or extent of territory of any particular nation...

土壌や気候や領土の広がりって、個々の国民については言わないでしょう。うちの庭の気候なんて考えないでしょう。スミスは農業者だけを考えているわけ？ そんなわけはない。この直後の有名なピンの分業から見て、この人は農業者以外の人を念頭においている。

The policy of some nations has given extraordinary encouragement to the industry of the country.

この Industry of the country って農業のことだけれど、国民が農業振興策をする？ 国に決まってるでしょう。

というわけで、自然に考えればこの nation は国なんだ。でも既訳は、これをどうしても国民と訳さなきゃいけないと思いこんでいるもので、すっごいこじつけをする。「国民の気候」とか平気だし、国民が一人で農業政策したりする。途中でおかしいと思わないのかな。思わないらしい。

文脈より自分の勝手な思いこみを優先させる。中身をきちんと読んで理解せず、平気でねじまげる。そういう翻訳方針で、まともな訳になってるとはぼくはとても思えないな。実際、『国富論』のある邦訳は、別宮貞徳の欠陥翻訳シリーズに取り上げられるほどの代物だった。あのシリーズは、一ページに本質的なまちがいが10箇所はないととりあげないからね。ちなみにそのとき、なにやら訳者の弟子らしき学者が出てきて、「いや、あれはあれでいいんだ」と強弁してまわっていて、呆れ果てたなあ。文中で、「一軒の家はどう転んでも一軒の家だ」という強調で、「A house」と書いてあるのを、訳者が「A型住宅」と訳して別宮貞徳に「プレハブ住宅じゃあるまいし」とバカにされていたんだけど、そいつは「いや、当時もそういう大量生産住宅があったかもしれない」とかなんとか。いやあ、恥も知らなければ、学者としての最低限の学問的良心もない、年寄りのご機嫌取りと提灯持ちだけのクズがいるんだね。

どうして日本の歳寄りは、nation を「国民」と訳するのが好きなんだろう。いまだに national accounts は国民経済計算という表現を使う。熟語になっちゃってるのはわかるけど、だれかが旗降って、せーので変えればいいのに。経済分野だけじゃない。アメリカカ

のとっても有名な映画に Birth of a Nation というのがあって、D. W. グリフィスの大作なんだけど、これの邦題が『国民の創生』というのだ。なに、国民の創生って？ 意味不明でしょう。この映画はアメリカが独立してリンカーンが演説して、というアメリカ建国映画なのだ（ただし後半になって、いきなり KKK 翼賛黒人バッシング映画になってみんなひっくり返るけど）。だからこれは当然、『ある国家の誕生』というのが正しい訳なのだ。でも日本の映画ヒョーロンカはこれを『国民の創生』と表記しないと、無知とかなんとか言ってせせら笑ったりする。この邦題がおかしいと指摘できないテメーらのほうがアホだ。

この本の意義

さて、この本の意義は……きかなきゃわかんないようなら、かなり困りものなんだけれど……

えー、この本はさっきも書いたとおり、経済学というものを創り上げた一冊だ。現在のあらゆる経済学は、すべてこの本を根底に持っている。冒頭に出ている分業の重要性、そして何よりも、需要と供給をマッチさせる見えざる手、といういまの市場経済の根幹をなす考え方を、アダム・スミスはこの一冊で確立した。経済学っていうのは、すべてこれをベースとしつつ、ときにこの見えざる手がうまく機能しない場合についてあれこれ議論している学問体系だと思ってまちがいない。いわゆるミクロ経済学は、ほぼアダム・スミスの枠組みの中にある。

マルクスはそこで、生産力がガンガン上がって供給関数という考え方が成立しなくなったときのことを考えた。同時に、労働という特殊な商品の特殊性について考えた。それは人間という存在を考えるとときには大事なんだけれど、でもスミスの枠組みの中の、特殊ケースでしかない。ただそれは、個人レベルで見れば、どうしてもゆずれない最後の一线だ。これ以下の値段ではおれが生きていけないという最低ラインがあって、それをどう確保するかがあるときには死活問題になる。だからある時代の労働者にとって、マルクス経済学は最後の砦となって、一時あそこまで世界を席卷したわけだ。実は、この供給関数が成立しない世界と、労働の話の部分とは、ぼくは必ずしも整合性があるとは思わない。それって実は、だいじなんじゃないかと思うんだけど、これはいずれまた考える。

ヴェブレンはそこで、金持ちは消費を見せびらかすのが目的だから市場は成立しないよ、という話をした。これまた特殊例だ。シュムペーターは、創造的破壊とか言ってかっこいいのもてはやされる。でも、それは結局、スミスの枠組みは必ずしも固定なものではなくて、時代とともに変化していくよ、と言っているわけだ。あとはだれだ。いろいろ

いるけれど、みんなスミスの基本的な考えを精緻化したり、数式をつかって明快にしているだけなんだ。

たぶん、スミスから重要な形で発展が起きたのは、リカードが出てきて、そしてその後限界革命が起きたときだろう。それでもそれは、スミスの改良以上のものだったか、という点は議論が分かれる。唯一、ケインズだけがスミスに匹敵する新しい考え方をつくった。個人レベルではスミスはおおむね正しいけれど、社会全体として考えたら、需給がマッチしない場合もある。そのとき政府の公共投資や財政政策が意味をもってくるという、いわゆるマクロ経済学の枠組みだ。

この訳の意義

いや、本来であればいまさらこんな訳がでる意義は皆無のはずなのだ。岩波文庫や中公文庫ですら高すぎるというケチな連中が、ダウンロードして1000円ほど得した気分になってうっしっし、というその程度の代物であるべきなのだ。

ところが冒頭でも述べたとおり、既存の国富論の訳は、題名からして誤訳をさらけだして平然としている、恥知らずの代物だ。中公文庫も五十歩百歩。この経済学の基礎中の基礎の代物に、まともな翻訳がないのだ。したがって、それをまともな形で訳して紹介することには重大な意義がある。いま、多くの人にとっては初めて、『国富論』がまともな形で提供されることになる。

日本の経済学界は、それでも平然としている。冒頭でも述べた通り、既存の翻訳のためさ加減については、別宮貞徳がピシピシ指摘を行っている。でも、それをきちんと受け止めて、まともな訳を出そうというだけの気概も良心もないわけね。

もちろんいまさらアダム・スミスでもないでしょう、という気分はあるのかもしれない。不均衡動学のこの時代に、

一方で、『国富論』には経済のこれもウソだ。確かにこの本は、いわゆる経済学の元祖だ。だから経済学ジャーゴンは使っていないという意味ではわかりやすいかもしれない。でも、まずその代償として、くださしくてまだるっこしい。専門用語が使えれば一発ですっきりすむところが、うじゃうじゃと書かれている。

さらにもっと重要なこと。この一冊を書いた段階では、アダム・スミスは自分のどこがすごいのか、よくわかっていない。さらに、当時はもちろん経済学という学問はなかったんだけど、それはつまり、ぼくたちの考える経済学以外の話もいっぱい入っているということだ。とりあえずなんでもぶちこんであるし、そしてそれが必ずしも一貫していない。そりゃこれだけ長い本だもの。

そしてもう一つだいじなこと。アダム・スミスの考え方には、まちがったところ、不十

分なところがたくさんあった。だからこそ、その後それが発展して改良されて、いまの経済学が成立した。ときどきアダム・スミスを読みかじって「アダム・スミスは有限会社を認めていなかった！」とか「アダム・スミスは経済だけでなく道徳も重視した！」なんてことをしたり顔で語る馬鹿な連中がたくさんいる。ふーん、それで？ アダム・スミスは、マルクスのような教祖様にはならなかった。だからアダム・スミスの書いた話をもとに現在の経済学その他を批判しようというのは、まったくのナンセンス。マルクス主義経済学なら『資本論』の268ページでマルクスがこう言っている」といえばそれは有効な批判になるかもしれない。でも近代経済学では、

じゃあ何のために？ 正直いって、経済学を勉強したいなら、こんなものをちんたら読むよりスティグリッツでもマンキューでもサミュエルソンでもいいから、経済学の教科書をお読みよ。

どこに優れた洞察があったか、そしてどこでまちがったか。そのまちがいは、実はマルクスにも受け継がれている（たとえばその労働価値説なんかに）。数学や科学なら、そこで練習問題を二十個くらい解いてみると、気をつけるべきポイントがだいたいわかる。でも経済学だと、なかなかそうはいかない。

ちなみにぼくは、マルクスだってまともな訳になっているとは思わない。代々木に巣くってるあの連中が、党の方針に従ってマルクスの著書の翻訳をねじまげている話は、金塚「オナニー」貞文訳の『共産主義者宣言』解説に書いてある。